

Member

Associate Professor 伊藤香織

Assistant Professor 丹羽由佳理

M2	M1	B4
石黒泰司	荒井隆太郎	大谷唯子
石橋理志	池田俊介	大矢遼太
伊藤慎吾	上原慧史	岡本薫子
大久保遼一	後藤洋子	川満まり子
小野田龍	萩原豪	川又千佳
鎌田健太郎	藤井田仁	高橋真有
川上那華	星洗祐	竹中翔
古川正敏	堀口裕	西村尚宏
関口由佳		藤井圭司
吉本浩卓		矢萩智
		吉田恵子
		吉村元宏
		渡邊諒

fab C. vol.7

2013年1月1日 発行

□編集

大矢遼太 渡邊諒

□発行

伊藤香織都市計画研究室
東京理科大学理工学部建築学科
〒278-8510

千葉県野田市山崎 2641

TEL 04-7123-4785(研究室直通)

URL <http://www.rs.noda.sut.ac.jp/~i-lab/>

□印刷・製本

祥美印刷株式会社

fab C.
vol.7

THE ENDLESS CITY

鯨立プロジェクト

2-5

ピクニックインタビュー

6-9

研究室の活動

10-11

個人の活動

12-13

論文 & 設計

14-15

ジャカルタ滞在記

16-17

fab C. は東京理科大学工学部建築学科伊藤香織研究室が発行するフリーペーパーです。研究室の活動を中心に、都市の研究とデザインに関する情報やメッセージを発信する媒体を目指しています。



鯖立プロジェクト

2011

- 3月 東日本大震災
- 6月 被災土蔵調査他
- 7月 古建築調査他
- 8月 まち調査他
- 9月 測量調査他
- 12月 海外研究員案内

2012

- 3月 住民WS/ 計画案 ver.1.0
- 4月 藤浜地区調査
- 5月 藤浜地区測量
- 7月 RMIT-TUS WS/ 藤浜プレゼン
- 8月 聞き取り調査/ 防潮堤勉強会
- 10月 自治会打ち合わせ
- 11月 模型・CG制作
- 12月 古写真展/ 意見交換会

概要



宮城県気仙沼市の唐桑半島にある鯖立（しびたち）は、豊かな歴史と文化と景観を持つ漁村集落です。2011年の東日本大震災で津波被害を受け、海沿いの低地では家屋や漁業施設が流されました。伊藤研究室は、東京大学生産技術研究所・太田研究室、芝浦工業大学デザイン工学部・桑田研究室らとともに2011年夏より鯖立を訪れ、ときに海外の学生等を交えて、地域の空間的・文化的資源を発掘するとともに、長期のまちづくりを見据え、復興計画策定に向けたサポートを行っています。

歴史・文化

1675年に紀州から和船5隻が鯖立港にやってきた際、住民は紀州の漁師を手厚く迎え入れました。そのお返しに鰹溜釣り漁法を伝授されたことから「三陸地方鰹一本釣り発祥の地」と呼ばれ同地方の発展にも大きな影響を与えてきました。漁業を主要産業としてきた集落の姿を過去の航空写真や古写真で見ると、港には多くの大きな船が着いて賑わいがあります。港付近の低地には住宅と納屋が密集し、すり鉢状の地形の斜面には今では信じられない高さにまで畑を広がっていました。そこからは漁師の夫がいない間家族を守る女性のたくましい一面と半農半漁の生活が読み取れます。

まちづくりサポート



伊藤研究室を含む3研究室等は、2012年3月の住民ワークショップを通して「鯖立港まちづくり計画案 ver.1.0」を提案しました。これは、災害時の避難を容易にし居住と産業をつなげる集落道ネットワークと、集落内点在型高台移転を一体的に考えるものです。2012年夏からはトヨタ財団の研究助成を受け、まちづくり支援を政策提言に結びつけるべく活動を続けています。今冬からは、安全で暮らしやすく持続可能なまちづくりを目指す包括的な計画案ver.2.0に向けて、模型やCGによるシミュレーションを行い、地域の皆さんとの話し合いをしています。

鮪立プロジェクト

2011年3月11日、未曾有の大震災で津波による被害を受けた地域の一つ、唐桑町鮪立の藤浜地区では、震災から1年以上が経った後も、住宅や港作業場は仮設であり、住民は焦燥や苛立の真只中にいました。2012年度4年生の設計の授業で伊藤スタジオの課題を選んだ3人、大谷、高橋、渡邊は、仮設住宅から藤浜へ通い養殖業を営む4世代9人家族の鈴木家に焦点を当て、鈴木家の新たな住宅と港作業場の空間を提案しました。ヒアリング調査や実測から始まり、各々が漁村集落の未来を見据え、鈴木家の住民や漁業仲間に向けて2012年7月、現地藤浜でプレゼンテーションを行いました。

4 2 7

Design ~
漁村集落の未来を考える



B4からM2合わせて11名の伊藤研究室の学生が、6月29日から7月2日に行われたTUS&RMIT(Royal Melbourne Institute of Technology)WSに参加しました。日豪各2人の混成グループに分かれ、鮪立湾周辺のまちあるきをしながらフィールドサーヴェイを行い、3日間に渡りランドスケープ的な観点から未来の鮪立の姿を話し合い、提案を行いました。ワークショップの最終日には住民の方へプレゼンテーションをし、それぞれの提案を発表しました。



鮪立の漁業中心の暮らしや津波のスケールを体感することができました。また、ランドスケープを学ぶRMITの学生の新鮮な意見や地元の方の復興に対する考えを伺えたことは、建築学生としても、個人としても、何が出来るのか考えるきっかけとなりました。

B4 川又千佳

基盤だけ残った住居跡地の近くで、新しく住宅が建設されている風景を目にしたのが非常に印象的で、大変考えさせられるものでした。短い期間でしたが RMIT の学生と共に意見を出し合い、住民の方々の意見を聞いていくうちに、だんだんと鮪立の魅力を感じることができました。

M1 後藤洋子

7

TUS & RMIT WS

12

古写真展



地域の方々が持っている古写真68枚を0.6m×2.8mの紙にまとめ、集会場と仮設住宅に展示しました。研究の一環で住戸訪問した際に収集したもので当初公開する予定はなかったのですが、皆にも見てほしいという声もあり実現しました。展示してみると懐かしんだり、解説してくれたり、写っているものを確認しあつたりと写真の前に自然と輪ができていました。今後はもっと写真を増やしていくと同時に、被写体の情報を聞き取り整理しまとめ、将来的に鮪立の財産になるよう活動したいと考えています。

M2 石橋理志

ピクニックインタビュー

今回のピクニック・インタビューには、プロジェクトエディターの紫牟田伸子氏をお迎えし、恵比寿ガーデンプレイスでお話を伺いました。



Guest.



紫牟田 伸子(しむた のぶこ)
プロジェクト・エディター /SJ 主宰

美術出版社、日本デザインセンターを経て、2011年に個人事務所開設。福井市地域活性化プロジェクト「おいしいキッチンプロジェクト」墨田区ものづくりコラボレーション「墨田 Hanami プロジェクト」など、地域のものづくりや地域活性化プログラムの

立案、書籍やウェブサイトの編集、デザイン、アートの調査や執筆を行う。共著に『シビックプライド 都市のコミュニケーションをデザインする』『ワークショップ 偶然をデザインする技術』など。シビックプライド研究会立ち上げメンバー。



Topic1. 編集するとは。

編集をするってことが何かに応用できるだろうって考えたのは、美術出版社である程度やっていた時期です。物事を組み立てていくということは、人に依頼して、一体誰が実現するのか、文章を書くのならライターだし写真なら写真家、それらを採配し、まとめ、そしてレイアウトして、印刷して形にすること。



このプロセスの問題と、企画して編集するという問題、この両方があります。この二つの問題が密接にリンクしていく時、この時に何を考えるか、これがなんかとっても面白い。これはどんな仕事でも同じなのだろうと思います。建築とか、まちづくりとか、特に創造のプロセスのときに同じじゃないかなって思っています。編集という話をしている、デザインと編集は不可分だと考えて

ピクニックインタビュー

います。デザインをしている人は必ず編集をしている。ただ、編集をしているということ自体は、意外と人にわかりやすいのだけれど、デザインっていうのは、ブラックボックスだから、わかりづらいものです。そこらへんを両義で持っているといひかなあとと思います。デザインの基本的定

義は「企画立案を含んだ設計やおよび意匠」なのですが、デザインを表層的に捉えている人も多くいる。そう思っている人たちをどうするのかっていうのが私たちの仕事ですね。

Topic2. なぜ都市に興味を持ったのか。



西洋の清々しさや歴史感に惹かれる一方、日本の風景が好きになれず、デザインでなんとかしたいという気持ちが強かった。しかし、私は街をつくる訓練は受けていないから、ものをひとつつくることを街を変えることになったらいいと思うんです。だから、東京ピクニッククラブを知ったときはすごいと思ったんです。フォークを持ち歩くことやワイングラスを持って集まることがすごい良いと思う。ピクニックをするだけで、つまり

その行為だけで、それにまつわるデザインがあることで風景が全然違うな、変わるなって。その後、シビックプライドの話を知りました。デザイン概念だけ広げてもしようがなく、街というのは何も考えずに体感できるものだから絶対面白いよねって。シビックプライドはまちづくりの話をしているのではなく、デザインの話をしている感覚があるんです。まちづくりから派生していく様々なものを取り込みながら、どうデザインしていくのかという手法がすごい面白いんじゃないかって思うんです。デザインとは何かを考えられて、その風景が10年20年その人たちの心に残るんです。

Topic3. なぜ地方に注目するのか。

地方に注目しているのではなく、地方に話題が集まりすぎている気がしている。実はもっと前から地方には課題があり、でも東京の方が楽しいからみんな集まっていたけれど、もはや東京も楽しくなくなってきているというか、次々と新しいものを生み出す東京のスタイルに底が見えてしまったんですね。だから、21世紀はリ・デザインの時代、つまりデザインし直すとか見直す機運なんだと思う。地方は今でも、何も無いとか面白くないというコンプレックスが強いけど、全体的にパラダイムシフトが起きているから面白い。福井のおいしいキッチンプロジェクトの時には、実はまちおこしとか地域活性化とは考えてなくて、地域経済活性化と考えていた。市場は東



京だから東京のセレクトショップで置ける物をつくらうというプロジェクトで、それによって地域は活性化してはいないけど、結果的にそのプロダクトが新聞や雑誌に載ることで地域住民の誇りの一つになった。そういうところがシビックプライドとプロダクトデザインの面白いつながりなんじゃないかと。地域活性・まちづくりをするために、ものづくりをすることも絶対に有効な手段だと思っているんですよ。

東京ピクニッククラブ
「恵比寿ガーデン・
ピクニック」



2012年10月6～8日、恵比寿ガーデンプレイスで行われた「恵比寿文化祭」の一環として、東京ピクニッククラブが「恵比寿ガーデン・ピクニック」を行いました。ガーデンプレイス奥のシャトー広場を一面のピクニック・フィールドにし、クラウドカメラによる上空からの記念撮影やピクニックコンテストなどを実施しました。伊藤研究室の学生もサポートメンバーとして参加しました。

研究室の活動

まちあるき



伊藤研では毎年3月に新4年生への研究室紹介を兼ねた、まちあるきを企画しています。今回は『LINE で都市をとらえよ』というテーマのもとワークショップ形式で新宿を歩きました。都市を構成する様々な線に注目し、それを写真で切りとり線をつなぎあわせることで、都市を自らの視点で再編集するという作業を行いました。成果物は、配管や溝といったものから、飛行機雲や水撒きの跡などの一時的なものも含まれ、興味深い結果が得られました。

建築設計資料集成



寸法と手法の観点から都市を見つめ直し今後の都市再生に役立てる『コンパクト建築設計資料集成<都市再生>』の出版に向け、2010年より編集の協力をしています。伊藤研究室は、「出来事」「フェスティバル」「創造都市」などに関わる箇所を担当しており、事例収集、調査、図面起こしなどを行っています。各大学の教員や学生、実務者が参加する分科会で、編集の方針や事例について話し合っています。

シビックプライド研究会



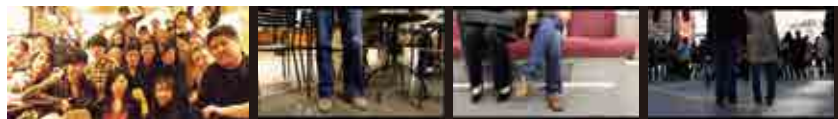
伊藤准教授が中心となって2006年から活動しているシビックプライド研究会に、研究室の学生や卒業生が参加しています。2012年は、定期的な研究会の他に、名古屋の国際デザインセンターでのトークセッション(3月)、松山のいよこロザン大学での講座(11月)、新潟上古町での「シビックプライド会議新潟」(11月)など、日本各地での活動も行われました。

岐阜コンペ



研究室の有志で、岐阜デザインコンペに挑戦しています。コンペの対象地である岐阜市柳ヶ瀬地区は、かつて人が行き交う際には肩があたる程賑わっていたと言われていたようですが、いまは駅近にも関わらず人通りが少なく商店街は活気を失っています。伊藤研究室チームは、10月中旬に行われた現地見学会に参加し、同時に現地調査も行ってきました。岐阜の歴史的文脈を辿りながら、岐阜らしいまちなか居住の提案を行いたいと思います。

ミネソタ大学デザインスタジオ発表+交流会



建築家ブレイン・ブラウネル氏が指導するミネソタ大学の東京でのデザインスタジオの最終発表会を伊藤研と合同で行いました(2012年1月)。アメリカの学生が作成した東京の映像を通して、私たちも東京に対する新鮮な発見をしました。その後は街に出て懇親会! 建築を専攻する学生同士、あっという間に意気投合しました。

個人の活動

第6回 長谷工住まいのデザインコンペティション「身近な場所のリノベーション」 佳作受賞

「私の場所がつくる都市、
都市のなかの私の場所」

M2 石黒泰司



敷地は高低差の激しい地形に木造住宅が密集する赤羽西エリアです。既存の木造小住宅に対して小さな床をいくつも挿入し、木造住宅のスケール感を保ちつつ空間を再構成することにより、個々の住宅と住宅、さらに住宅群と地形をつなぎ、住戸から都市へ展開する躍動的な集合住宅（まとまり）が生まれます。自分の部屋から隣の部屋へ、さらには自分の生活する地域へと意識が広がっていくような集合住宅を提案しました。

UBC (The University of British Columbia) WS

UBCのワークショップ・リサーチプロジェクト(2012/10/22-11/12)に参加しました。WSは一年おきに開催されており、今回のゲストである建築家・西田司氏が、神田・神保町エリアを対象として、「コネクティング・ポイント」のテーマを出題しました。UBCの学生と共に、フィールドワークや合同リサーチ、ミーティングを通して、対象エリアに相応しいビジネスモデルの原型を提案しました。

M1 星光祐 堀口裕



PICNOPOLIS LONDON

東京ピクニッククラブのメンバーに同行し、ロンドンの建築フェスティバルの一環としてHoxtonSquareにて開催されたPICNOPOLIS LONDONに参加しました。展示や「クラウド・カメラ」の操作などをサポートしました。ピクニック発祥の地で、東京発信のピクニックが楽しめる光景がみられました。

M2 小野田龍



柏の葉景観マネジメント研究会

開発の進む柏の葉キャンパス駅周辺の景観資源発掘調査を行っています。学生ならではの視点で明らかになった資源を、行政・市民を交え確認し、景観重点地区以外の地域での景観規制策定を目的とした活動です。

M1 荒井隆太郎 池田俊介 B4 大矢遼太



研究発表

「都市内カンボンにおける街路空間利用に関する研究—ジャカルタでの調査に基づく分析—」
池田俊介, 伊藤香織, 丹羽由佳理 (2012), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.691-692

「キス・アンド・ライドの実態と利用者意識—つくばエクスプレス沿線駅を事例として—」
萩原豪, 伊藤香織, 丹羽由佳理 (2012), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.839-840

「街路網構成と商業施設分布による中心市街地の比較分析」
星光祐, 伊藤香織, 丹羽由佳理 (2012), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.1139-1140

「首都圏郊外鉄道駅のキス・アンド・ライドの実態と交通手段転換可能性」
萩原豪, 西村尚宏, 伊藤香織, 丹羽由佳理 (2012), CSIS DAYS 2012 空間情報科学研究センターシンポジウム p.32

「こちら院生室 12 東京理科大学大学院 理工学部研究科」
伊藤慎吾 (2012), 月刊 地図中心, 483 号, pp.38-39

2011 年度 卒業論文 (通年)

都市内カンポン住民の街路空間利用に関する研究
—ジャカルタでの調査に基づく分析—

池田俊介 富永貴之 福原香菜子 山本桃子

キス・アンド・ライドの実態と利用者意識
—つくばエクスプレス沿線駅を事例として—

芹沢瞳 西村尚宏 萩原豪

2012 年度 卒業論文 (半期)

フリーマーケットに見る一時的な空間形成

高橋真有 矢萩智 吉田恵子

街路空間のユニバーサルアクセシビリティ

—移動制約者の行動調査を通して—

大谷唯子 藤井圭司 渡邊諒

2011 年度 修士論文

市民へ向けた都市プロモーションの可能性 —都市像はいかに発信されるか—

片田江由佳

建築・都市デザイン教育とリテラシー —認知地図と評価言語にみる学習経験の表れ—

佐藤美緒

都市環境における日本庭園の景観分析

田中理恵

地方商店街とプロスポーツクラブの関わり方 —岡山県における価値構造の分析を通して—

宮崎高明

2011 年度 卒業設計

ヨウギシャのコムニタス

星光祐

東京理科大学理工学部

建築学科卒業設計賞 (優秀賞)

近代建築 2012 年 6 月号掲載

Shinkawa Life Center

上原慧史

つながるホール

大木美穂

大学キャンパス内における住宅区計画

邱智エン

縮小するマチ

佐藤祐理

STROKE LIBRARY

田中瑠璃

nomadic air ship

永井智裕

blackboxcity

堀口裕

metaphysical assemble of

regional community

山本浩平

2011 年度 修士設計

notation for activity

—都市空間にアクティビティを記述する—

兼森毅

中山間のノマド

—棚田での労働に着目して—

早川雄大



星光祐



兼森毅



早川雄大

ジャカルタ滞在記

研究室メンバーの活動のフィールドは、日本国内だけにとどまらず、海外にも広がっています。設計と研究のためインドネシアのジャカルタに滞在した大学院生に現地の様子や活動を聞きました。



修士設計の一環として、単身でジャカルタに乗り込みました。これは新しい MCK の提案です。MCK とは、トイレ、井戸等の機能を持つ公共の水場設備のことです。この MCK は雨水を集め、炭などのフィルターを通し飲み水にする機能を持ちます。現状、敷地周辺には MCK が無く、住民は水の確保に苦勞をしています。この実験的な MCK から、この土地に新しい水場空間をつくり出します。言葉の壁、敷地の問題、材料の確保などの問題に苦戦しながらも、現地の人達と協力し 1 ヶ月程で完成しました。この街の将来を考える時、遠くの未来への前提をつくるのではなく、今、私が目にして問題についてひとつひとつ解決していくことが、遠回りではあるが、真の近道であることを改めて感じました。



M2 古川正敏



M2 吉本浩卓

昨年に続き 3 度目の滞在では、自身の修論テーマ「建築行為に関するコミュニティルール」を探ることを目的に、9 月上旬から約 1 ヶ月間、ジャカルタ州チキニというエリアでインタビュー調査を行いました。インドネシア大の学生に通訳を依頼し、まずいくつかの行政機関に出向き、正規の建築手続や遵守事項、罰則を把握。残りの期間でチキニの村長や住民、大工さんにインタビューし、ローカルに守られているルールや風習を把握するという流れでした。聞かなければ解らないようなユニークなルールが多数存在し、一見、無秩序に広がる居住地の中にも秩序があることが解りました。自分が現地で建てられるようになる程に情報収集することを念頭に置いていたので、建築手続には強くなれたことを実感しています。インドネシアへのロングステイは私にご相談ください。

